

米倉二郎著

東亜の集落

渡辺久雄

わが国をも含めて、東亜に対する著者の愛着は強く、またその根源の深いものがある。古くは、ペンク、リヒトホーフエン、ウィットホーゲルをはじめ、比較的新しい時代では、クレッシシー、バック、ホールなど、世界の諸学者の情熱も、その大きな比重で、東亜に注がれて来た。わが国でも小川琢治、藤田元春の両博士が東亜研究に多大の成果を残された。両博士の嚆矢に親しく接し、東亜に対して伝統を持つ京都大学の史学の学風の中で学ばれて開始された著者の歴史地理学的研究は、正しく一連の伝統的東亜研究の系譜につらなるものといえよう。

従来、地理学は足の学問といわれる程に実地検証を必要とする。特に比較地理学において一層それが要求される。もちろん地理学における理論と体系も重要であるが、それにもまして事実、事象の確認が大切である。いわば研究の出発点である。この上に体系が組み立てられ、理論が構成される。このことが、そのままつくり著者の論文の中にうかがわれる。そこに歴史地理学の体系と理論の確固たる基盤があるわけである。

著者が、かつて京都大学地理学教室の助手として学生の野外研究指導を担当されていたころ、私もその一人として参加し、フィールド

ワークの何ものなるかを学ぶことができたが、今にして思えば、著者のフィールドにおける観察眼の鋭さと、解明の適確さの背後には、すでに研究上の大きな仮説があり、その究明に対する強い情熱があつたように思われる。それは正しく東亜の集落のイメージであり、それへの愛着であつた。爾来三十年、著者の多年の研究の結果は、ここに『東亜の集落』となつて結実を見たわけである。

本書は前・中・後の三編から組立てられている。前編は学史および総論であり、中編は古代および中世における日本の集落後編は中国の集落が述べられている。

序文によると、本書の骨子は、昭和十八年に京都大学人文科学研究所に提出した「東亜集落の歴史地理学的研究」であるといわれる。その内容をうかがうことができぬので適確にはいえぬが、前編および後編は、すべてこれに基いたものであろう。ただ中編は右の論文の他に、既発表の『集落の歴史地理』(昭和二十四年初版、三十五年改訂再版、帝国書院刊)と、さらに其後の研究を追加して、まとめられたものと思う。

前編第一章は「東洋地理学の伝統と歴史地理学」である。ここでいう東洋とは、中国および日本に限定されることは序文でことわつている。この東洋の地理学は古い伝統を持つにもかかわらず、近世に入つて西洋地理学を追うのに急なあまり、文化の伝統が、それぞれ特殊な地理的環境の中から生れ育つて来た重大な事実を忘れていくことを指摘している。特に地域差を認識し、そこから学問体系を立てようとする地理学こそ、各地に伝わる文化自体をまず認識する必要があるとし、こうした立場から、中国古代における地理学の源

流を求めて考察している。しかし紙面の制限の故か、はたまた中国文化の深遠のためか、多くは中国地理書の解題および、諸家の従来研究成果の紹介に止まっているのは、すこし淋しい気がする。これにつづく日本地理学発達史も同様で、むしろ第四節の歴史地理学に多くの期待を持ったが、謙虚な著者は、方法論の素描に止められて残念である。

第二章「集落地理学の発達」では、リヒトホーフエン、ラッツェル、マイツェンの集落地理学が紹介され、ついでその系譜につらなるドイツの集落地理学、またフランス、イギリス、アメリカの集落地理学の内容が、最後に日本における研究系譜が述べられている。

集落が、その地域の風土と民族に影響されて形成されることを思うとき、集落研究の方向付けもまた、それぞれの国によつて異なることは当然であるから、こうした国別の学風の紹介と批判は、まことに当を得た方法といえる。ただ欲をいうと、新しい集落地理学の特徴として都市研究の活発に行われている現在、その分野に対して、より多くの紙面の配慮が望ましかった。

近代都市は村落に比較して、風土と民族の反映の少ない点で確かに問題はあるであろうが、それなりにまた異なるつた角度からの地理学的アプローチが可能であるように思われる。それがまた村落をも含めた新しい集落地理学の研究にもつながることが出来そうに思う。なるほど歴史地理学的比較研究というサブタイトルが全編に付せられてはいるが、この章が集落地理学の発達である以上、そこまで押し進めて欲しかった。

第三章は東亜集落地理学概説である。集落の類型が、その地域の

風土と民族の相違に基いて決定されるというリヒトホーフエンやマイツェンの理論に従つて、まず東亜の集落を寒地狩猟集落、乾燥地遊牧集落、オアシス都城集落、高地農牧集落、南洋原始農耕および漁撈集落、季節風帯農耕集落の六の類型に入れる。この他に別個な基準から西歐化された都市および農村という類型のあることを追記している。

ついでかかる集落の類型の成立に与つた東亜の自然環境が説明されている。ここで著者も「東亜の自然環境に即して、それと整合関係にある東亜の社会環境の特性を素描し、これまでに成立した東亜における集落の特質を明らかにする前提となることをもつて足れり」とあるが、東亜集落の類型が、一応これらによつて決定されると考えられる限り、より詳細に論じていたできたかつた。従つて次節に述べられる東亜農村の類型と都市の類型が、都鄙という別個な範疇のもので現われるので、いささか不連続の感みがある。むしろ本章では、先きに東亜の自然環境と社会環境の解明があり、ついで先学の理論による集落の類型や都鄙の類型が述べられるのが、より理解し易いように思う。

しかしこれは大した問題ではあるまい。むしろ、次節あたりから展開する東亜における平野の開発、方格状地割の展開の中に、地理学者としての著者の優れた研究が現われて来るからである。ともすれば、集落地理学における歴史地理的研究が、制度史や社会経済史の明らかにしている点以上に出られなかつた現状にあつて、この二節こそは地理学独自の視野に立ち、新たな研究分野を開いたといふことができよう。人類文化のほとんどが平野の上に築かれたこと

を思うとき、平野のはたした役目は極めて大きい。近年、自然地理学の分野においても沖積平野を対象とした第四紀研究が盛んとなり、地盤沈下や臨海工業地区の造成をめぐつて、さまざまな問題が提起されているだけに、著者のこれを取上げた意義は大きい。その節の末尾に「これは四千年來われわれの父祖の經營の結果であり、それについての知識をきわめることは、現在の民生の安定のために、はたまた将来の開發のために資するものと信する」と結んでいるのは著者の秀れた識見を示すものであろう。

第七節、東亜における方路状地割の展開は、中編に述べられる条里制研究の、いはば序説として考うべきか、それとも本節のみを独立したものとして取上ぐべきか、章節の配置の上にすこし問題がありそうな氣のするところである。しかしこれを開拓に伴う計画的集落として把握し、広く東亜全域について、美しい航空写真と、豊かな地図を伴つて展望していられるのは、著者にしてはじめてなし得るところである。

中編に属する第四章は「古代における日本の村落」に始まる。第一節「農村としての条里制」は、昭和七年、『地理論叢』第一輯に発表したものの大部分を取録するが、当時、従来の歴史家による条里制研究に対して、地理学の立場から試みた新しい研究として高く評価され、以後の条里制研究に大なる影響を与えた画期的労作であった。特に条里制と村落の關係を論じた点では、学界の注目を浴びた。その後、この点については反論もあり、各地における実証研究の成果が、必ずしも著者の初期の考え通りではないが、全般的に見た著者の論述内容の価値はいささかも減じていない。

ただししかし条里制を大陸の直輸入とはせず、取入れたのは農村計画の一型式としての条里制の組み立ての仕方にあるといわれるが、組み立て方というものが、ここでは重大な意味を持つものではなからうか。「わが国では、たとえ太古以來大陸の技術の輸入により、しかも溝渠と畦畔の設置を主要事業とする水田の開發に際しては、すこぶる阡陌に似た地割が生まれつつあつたとしても、自然的ならびに社会的条件の差異にもとずき、わが国に固有なるものがこの間に發展しつつあつたとみるを至当とする。条里制が阡陌法とは異なる農村計画の一型式であることは、その組み立ての基礎となるべき、固有なる内容の發展を考えずには理解することができない」といつてはいられるが、しかし大陸の技術輸入により、条里制以前に阡陌に似た地割形成があつたとすれば、すでに何らかの組み立て方が輸入されていたといえるし、わが国固有のものがこの間に發展しつつあつたというのは何を指すのか明らかでない。むしろこの様な表現でなく、条里制以前に輸入された型式が阡陌法地割であり、それは農村開拓と呼ばれるにふさわしく、大化改新後に輸入された型式が、大陸の組み立て方式になつた条里地割であり、農村計画であると、明白に二つに分けて取扱うのはどのようなものであろうか。

第二節「条里制村落の成立過程」では、史料と实地踏査に基き、郡郷制の三〇戸一里、五〇戸一里の解明が、条里地割における比定で興味深く考証されている。

第五章は古代における日本の都市を取上げ、国府の研究がその中心をなしている。国府に関する研究は、従来文献史料の乏しいため、

おかれていたが、周辺条里の復原に基く地割検討がらアプローチする著者の方法は、歴史地理的な集落研究として極めて優れたものである。もちろん著者は国府と条里との関係について何らかの原則を求めようとするが、それは面積の広大さの故に蓋然的予察にすぎないことわつている。しかし歴史地理学が一つ一つの国府について試みをして始めてその上に精密な研究が集約的に行い得るのであるから、予察といつても基礎としての価値は高いものがある。

ただ一、二気になる点がないでもない。たとえば国府条坊線と付近条里線の方向の延長が一致する場合、それは条里線の適当な交差点を基準として国府位置を定め、これを取囲む条坊地割を画して府中となしたとする著者の原則は、地割形態の上から認められるとしても、それはどこまでも、無時間的に把えた一つの仮説であつて、国府が条里地割の上に、おかれて成立した証拠にはならない。その逆の場合も可能である。また同じことが周辺条里方向の延長線と一致せぬ条坊についてもいえると思う。「この種の国府は条里の施行に先立つて作られたものかと思う」といわれるがその根拠が明らかでない。

第六章、中世における日本の集落は、地理的慣性である集落位置と耕地地割の永続性を前提とし、マイツェンの手続に準じ、古文書、古地図を手掛に現在の大縮尺の地図と現地踏査を通して、主として中世の庄園とその集落の復原および解明を行つていられる。庄園集落は、これを発生期、成熟期、崩壊期に分け、社会的、経済的な歴史過程の中で、それぞれいかなる変化をなしたかを説明する。多くの従来の研究成果を引用し、計画的集居から散居へ、散居から再び

有核的集居へと、その推移を極めて論理的に述べていられる。地理学上、散居、集居の成因がさまざまに考えられているだけに、著者の研究は、その面に対して大なる貢献をしている。特に第二節、若狭小浜平野の歴史地理、第三節、尾張国富田庄の二論文は、いづれも原史料と現地踏査に基づく研究であるだけに貴重である。

後編、中国の集落は、著者もことわつているように、未完成の部分である。しかし未完成といつても、中国の如き広大な地域を対象とした漢民族の集落の歴史的展開と地理的分布、その集落類型の完全なる究明は、元来極めて困難な仕事である。そうした点を考えるに幾段階かに区切られた研究が必要であろう。それは縦割りに、歴史的展開に従つて区分された歴史地理であつてよく、また横割りにして地理的分布を中心とした地域区分の研究であつてもよいと思う。しかしこのように幾段階かに区切られた研究の積み重ねが開始されるときも、それに先立つて、やはり中国全体の一応の概観は確かに必要である。この目的に適うのが第七章、中国の村落、第八章、中国の都市である。そうした意味では決して未完成ではなく、一つの立派な使命をはたす完成品でもある。

第七章、中国の村落は、華北中原の展開、江南の開発、河北の集村と江南の散村、清代北満の屯墾、の四節から成る。これらの諸研究は、いづれも戦前の稿に成るものが大部分を占めるせいいか、一般に政治地理学的内容が伴う。しかしこのことは、中国という大地域を取扱うためには止むを得ぬところであり、社会経済史的考察とともに集落研究の手掛として必要なものであろう。

第八章、中国の都市では、南京と福州がその対象に選ばれている。

内容はその歴史的展開の過程が中心で、著者のいうように予察という言葉が、ここではじめてびつたりする。

以上が「東亜の集落」の内容であるが、全編を通して、論述の明確さは比類がない。読みかえさねばならぬ箇所は、いづれの章節にも一ヶ所も見出せない。著者の頭脳の明哲さに敬服するばかりである。写真、図版も豊かであり、本文の中の引用文献と、章末の引用文献の明示は、読者の便を図つて、巧みに区別されていて、極めて読み易く、かつ全体を把握するに好都合である。

明治・大正の先学の研究を十分に受継がれ、しかも新しい独創的な歴史地理学の分野を開かれた著者の研究は、一年有余のインドの研究を加えていよいよ発展されることを御期待申したい。

後輩であり、弟子である私が、まことに失礼な評を各所に加えて来たことも著者に対し深くお詫び申したい。とともに本文の一章一節が今も私の最大の指針であり、著者の亜流の一員である自覚に立つて、正統を仰いでいる次第である。

(A5判七八〇頁 昭和三十五年九月 古今書院刊 定価七八〇円)